

中村喜久美著「下野のくにから」下野新聞社 1996年6月5日刊を読む

ひとを褒める^ほ

1. 昨夜、親しい友人と電話で旧交を温めた。互いに責任ある立場に就き、以前のように頻繁に会うことができなくなった。夜、仕事を終えてからの電話がなによりのコミュニケーションである。
2. 「昨日、和田さんご夫妻に会ったの。相変わらず超多忙。ただあなたのこと言ってた」。
「ほんと。何て…」。
「まだ少し顔色が悪いって…」。
3. 思わず言葉に詰まる。そして考える。やっぱり病気かしら。見掛けほど精神力の強くない私は、すぐに他人の言葉に影響されてしまう。
4. この逆もしばしばある。
「今朝、小宮山さんたちと話したの。あなたのこと噂してたわ。いい仕事してるって」。
5. そんな日は朝から気分が浮き立つ。仕事にはずみがつき能率も上がってくる。部下の仕事ぶりも温かく見守れる。
6. 亡くなった母が口ぐせのように言っていた。「隠れての愛語が一番ひとを喜ばせる」と。他人の欠点を挙げるのはやさしい。しかし褒めるとなると意外と難しい。
7. 初めて管理職に就き部下の勤務評定をした日、鉛筆をなめなめ苦慮した。欠点ばかり目につく。近ごろは少し違う。年の功だろうか。良い面を探す。伸ばしてあげたい部分をぐんぐん引っ張る。
8. そして大勢の中で名を挙げて褒める。褒められた本人は倍増して伸びていく。後輩を育てる楽しさはこんなことにあるのかな。
9. 尊敬する先輩、故見当邦雄フタバ食品社長に教えていただいた。
「部下を叱るときは、誰もいない部屋で、これがコツですよ。そして最初に言ってあげるのですよ。『貴方らしくないことをしてしまったね』と」。
10. 成長していく会社の指導者は心の温かい人が多いように思える。心から社員の、そしてその家族の幸せを願う気持ちはきっと通じるに相違ない。

P96 ~ 98

[コメント]

尊敬する宇都宮グランドホテル中村喜久美会長のエッセー。コミュニケーションの基本がよくわかり有難い。